

# 臨床検査科

臨床検査科技師長 溝口 亜由美

## 1 部門目標

- ・院内外の研修会に積極的に参加し、自己研鑽に励む
- ・部門間で協力し合い、複数部門担当可能な人材育成に努める

## 2 業務体制・スタッフ

臨床検査科は、採血、検体検査（生化学・免疫・血清・血液・凝固・尿一般・輸血・細菌微生物）、生理機能検査、耳鼻科関連検査、病理・細胞診検査の各部門を検査技師 24 名、会計年度検査技師 4 名と委託職員(BML)6 名の合計 34 名のスタッフで運営し、日直・宿直・夜間勤務については常勤職員 1 名と委託職員 1 名の計 2 名で対応している。(委託会社は生化学・免疫・血清検査を実施)

## 3 業務実績

昨年度と比較した内訳は、血液部門 106%・273,519 件、採血部門 98%・25,910 件、一般部門 100%・130,504 件、輸血部門 109%・13,642 件、細菌部門 113%・34,266 件、病理部門 110%・12,418 件、生理部門 104%・13,223 件、耳鼻科部門 104%・3,489 件、委託検査の生化学・免疫部門、外注検査 111%と検査全般的に増加であった。細菌検査においてはコロナ関連検査が今年度も増加となった。

生理部門においては心臓・腹部とも超音波検査枠を増設した。今後の検査件数増加が期待される。

脳神経外科術中モニタリング 7 症例は術式の指示に従い MEP、SEP、ABR 検査を実施した。

病理部門においては術中迅速検査件数が前年の約 1.5 倍となった。

また、新規免疫染色装置により HER2 低発現乳癌患者を対象としたコンパニオン診断の院内適応判定が可能となった。

院内各種委員会等にも積極的に参加し、主な委員会としては、輸血療法委員会（副委員長）、感染防止対策委員会、医療安全管理対策委員（セーフティーマネージャー）、SCT 委員会、ICT 委員会(委員長)、NST 委員会、DMAT などチーム医療に参加し、CPC を開催するにあたり資料作りなど日常の業務と平行して励行し、病院運営に寄与している。

臨地実習生に関しては 4 月から 8 月かけて 4 名の実習生の臨地実習指導を行った。

## 4 1 年間の総括

部門目標にとした「学会・研修会への参加率向上と、複数部門担当を可能とする人材育成」では合計 25 人が 169 の学会・研修会に参加、1 人平均 7.4（昨年度 9.8）回の参加となった。WEB 研修が主流であった前年に比べ現地開催が増加したことにより参加数が減少したと考えられる。

複数部門担当可能とするため耳鼻科検査担当の増員、術中モニタリング業務を担当するスタッフの育成を開始した。

タスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会は 25 名中 22 名が修了した。

各分野で認定資格の取得に励み、より専門的な知識や技術の研鑽に努めている。

昨年に続き、院内の SARS-CoV-2 検査（遺伝子増幅法）は 24 時間体制で実施した。

## 5 今後の目標

新病院移転に向け、高度な診療を支えていくためには更なる専門的な知識や技術が求められる。より精度の高い検査を目指し、学会・研修会へ意欲的に参加し、自己研鑽に努め、技術・情報の収集・学会・研究会での発表・投稿を積極的におこなう機会を設け、医師や看護師の業務軽減に繋がる改善や、医療安全管理などのチーム医療に積極的に取り組み、病院運営に貢献していきたい。

臨床検査科令和 5 年度学会発表・論文・著書等

### 【令和 5 年度】

#### 1) Diagnostic Stewardship の実践

検査前過程における Diagnostic Stewardship ～検体採取・輸送・保存法～

静野健一

第 72 回日本医学検査学会 (2023 年 5 月)

#### 2) ベーシックレクチャー 確認しよう、薬剤感受性 結果の読み方

静野健一

第 38 回日本環境感染学会 (2023 年 7 月)

#### 3) 主要な耐性菌の検査法 ABPC 耐性インフルエンザ

静野健一

臨床と微生物 50 巻増刊号 (2023 年 10 月発行)

#### 4) 教育講演 市中病院における LAMP 法の運用紹介

静野健一

第 15 回 LAMP 研究会 (2024 年 3 月)

#### 5) めざせ”達人” 知っておくべき豆知識 グラム陽性菌③

静野健一

第 28 回関東甲信地区マイクロスキャン研究会 (2024 年 3 月)

#### 6) 千葉県内主要機関における輸血用血液製剤管理体制アンケート調査 (第 2 報)

丹麻美

第 71 回日本輸血・細胞治療学会学術総会 (2023 年 5 月)